

社説

【2019.7.24】

東京五輪まで1年

会長」と、30個の金メダル獲得を目指す。過去最多は1964年東京と2004年アテネの16個。ほぼ倍増となる高い目標である。

1年後の舞台に立つ日本代表争いも、それだけ激しさを増してこよう。陸上男子1000mでは桐生祥秀（日本生命）、サニブラウン・ハキーム（米フロリダ大）の両選手に続いて小池祐貴選手（住友電工）も9秒台に突入するハイレベルな戦いが続いている。体操では、リオデジャネイロ五輪の金メダリスト白井健三選手（岸根高一日本体大大学院）が10月の世界選手権代表から漏れたが、ここからの巻き返しに期待したい。

全競技を通じて日本代表第1号となったのが飛び込みの坂井丞選手（ミキハウス）だ。今月13日の世界選手権決勝で12歳年上の寺内健選手（同）と組んで入賞し、栄冠を勝ち取った。リオでの予選落ちの失意を乗り越えてきた相模原市出身の26歳は「やっとスタートラインに立てた」と実感を込めて語っている。

開催都市が提案する追加種目として実施される競技にも注目したい。小紙の連載「THE REAL（リアル）」で続々と紹介されているように、「女子チロリ」の異名を取るソフトボール代表の山田恵里主将（厚木商高出身）のようなベテラン

がいる一方で、サーフィンの村上舜（湯河原町出身）や松田詩野（茅ヶ崎市出身）、スポーツクライミングの緒方良行（神奈川県）、スケートボードの藤沢虹々可（厚木清南高）の各選手ら、有力な「神奈川県育ち」の若者たちが夢に近づいている。

緑にあふれる「杜のスタジアム」がコンセプトの新国立競技場も、その全容を現してきた。ことしは近年では珍しく低温が続いているが、1年後の大会期間は当然、厳しい暑さが見込まれる。熱中症をはじめゲリラ豪雨や台風などの対策でも、多くのレガシー（遺産）を残せるように万全の準備を進めたい。

レガシー残せる準備を

2020年東京五輪の開幕が、きょう24日であと1年に迫った。32回目にして日本で2度目となる真夏の祭典には、いずれも史上最多の33競技339種目に、200以上の国・地域から1万人超の参加が見込まれている。自国での五輪出場に向けて汗を流しているアスリートたちにはエールを送りたい。

6月に山下泰裕会長が就任した日本オリンピック委員会は「五輪成功には開催国の活躍が不可欠」（山下